



セブンスブレイブ 4

チート?NO!もっといいモノさ!

α L P H α L I G H T

乃塚一翔

nozuka issyou



アルファライト文庫



Samurai



ミマサカ

美作サクラ

18歳。小柄で巨乳の和風美人。
物静かなBL専門の腐女子。

Sniper



ユキシロ ク

雪代九々

18歳。クラス委員。
常識的な感性を持った苦勞人。

Luna Wolf



イヌアジ ヤコウ

戌伏夜行

18歳。本編の主人公。
仮面剣士との戦いで左腕を失う。

主な 登場人物 Main Character

Princess



クリスティアーネ=ラ=ヴァナ

17歳。『帝国』の第3皇女。
盲目的なまでの正義信仰者。

Princess



クリウス=ラ=ヴァナ

21歳。『帝国』の第2皇女。
食い意地だけは誰にも負けない。

Machinery General



キ シマ チ カゲ

鬼島千影

18歳。脳味噌筋肉。
いつも豪快でテンションが高い。

Slayer



ガ テ マサチカ

伊達雅近

18歳。夜行の幼馴染。
怠惰なイケメン。頭の良さは本物。

????



ドウサン=アシカガ

魔族の中で指導的役割を務める男。
帝国に間者を送り込むなど暗躍する。

General



テスラ=リッジバック

19歳。帝国4将軍の1人。
記憶を失い僻地を彷徨っていた。

Caesar



ホウロンイン ツツジ

鳳龍院躑躅

18歳。人目を引くお嬢様。
本性は真性のサディスト。

Assassin



ヤナギモト ヘイスケ

柳本平助

18歳。エロスに生きる男。
ブレーキの壊れたスケベ魂を持つ。

ラ・ヴァナ帝国第3皇女、クリステイアーネⅡラ・ヴァナ。

皇女として生まれながらも、武術將軍であるゴスベルⅡハウザーより幼少から教えを受け、^{よむ}齡17にして帝国有数の劍豪と讃えられる変わり種の皇族。

彼女は強い正義感から不正や不義を嫌い、弱者救済こそ己の務めと見定めた。

現皇帝クロウスター——つまり父親が病に倒れ、姉の第2皇女クリュスが国政を任されるようになった砌、帝国各地を巡る旅に出た。

この世で誰よりも慕う姉の心労を少しでも軽くするため、クリスタと名を変えて、仮面を被って正体を隠し、帝国に蔓延る悪の芽を摘んだ。

そうすることで姉を助け、民を救った。

人の心に触れる能力を持つエルフの血を継ぐクリステイアーネは、隠れ潜む悪を暴くことに秀でていた。

方々を巡り、賊徒を、罪人をひたすらに斬った。

斬って斬って斬り続けて、いつしか彼女の掲げる正義は、少しずつその形を変えて行った。力無き者達を救う。弱者を護る。

民衆の盾となることを望んでいたクリステイアーネの信念は、己自身でも気付かぬ内に変わっていた。

護るから斬るへと。全ての民を護る盾ではなく、遍く悪を斬る刃へと。悪を裁く剣こそが、絶対の正義であるのだと。

——こうやって帝都に戻るのは、いつ以来だろうか。

クリュス姉さまは10年近く前から全く変わっていない気もするが、姉さま曰く、わたしが旅立つ前と比べ、身長が3ミリ伸びたらしい。

リスタル姉さまは、心なしか顔色が良くなっていて安心した。

どうやら好きな男——クリュス姉さまが召喚したという勇者の1人——が出来たらしく、嬉しそうにそのことを話していた。

帝都に戻る途中、勇者達の活躍はわたし自身何度も耳にした。

数万もの魔族軍をただの一撃で壊滅させた、『巨橋ゴリアテ』を粉々に砕いた、など。果たしてどこまでが本当かは分からないが、頼もしい限りだった。

実のところ、そうした噂の数々を聞いて居ても立ってもいられず、わたしはこうして帝都に戻って来たのだから。

陽の沈みかけた夕刻。

宮殿を離れていた勇者達が戻ったと衛兵から聞いたわたしは、胸が躍るのを抑え、彼らが居るという第3練兵場へ向かった。

——けれどその途中、何かが崩れるような轟音が響く。

何事かと走った私の目に映ったのは、激しく破壊された壁の数々。

まさか敵襲か。練兵場に居るはずのクリュス姉さまは無事か。

わたしは、血の気が引く思いで練兵場に辿り着いて——そいつを見付けた。

「——ッ!？」

フードをすっぱりと被った、赤黒いロングコート。

視界に姿を取めた瞬間、背筋を貫かんばかりに伝わってくる禍々しい気配。

凝り固まった怨嗟、溢れる憎悪。かつて呪いの品を目の当たりにした時と同じ、あるいはそれ以上に強い圧迫感。

考えるよりも早く、腰に佩いた『ジャッジメント』を引き抜く。

魔力を通し、剣身に青薔薇の模様が浮かび上がるのを視界の端に収めて、あの男の——ヤコウの胸を貫いた。

わたしは独りでに口の端が吊り上がるのを感じつつ、更に切っ先を押し込んで、己が胸から突き出た切っ先を眺める悪へ向けて叫んだ。

「探したぞ、ジョーンズウ……いや……ヤコオオオオツ!!」

Ψ

——ずるり、と。

青薔薇を浮かべた剣身が、戊伏夜行の身体からゆっくり引き抜かれる。

衣服には穴どころか傷ひとつないが、夜行はその場から動くことも倒れることもなく、衣服の隙間と口元から、止まることなく血を流し続けていた。

「な、んで……え? どうし、て? なんで、やこうさま……血……あ、え?」

頭上に添えられたままの、硬く強張った夜行の手。

飛び散った真紅の血液で、べつとりと頬が濡れた。

眼球が零れそうなほど目を見開いたクリュスが、言葉にならない声を零す。

そんな彼女の姿を、血で飾られた剣を握ったままのクリステイアーネが一瞥して叫ぶ。

「ツ……クリュス姉さまから、離れろおお!!」

煌く白刃が青い軌跡を描く。

下段から振り上げられた斬撃は——夜行の右手首を撥ね飛ばした。

ほとりと、音を立てて落ちる右手。

「——あ」

それを目で追ったクリュスは、斬り落とされた手首が、なんの前触れもなく燃え上がるのを見た。白い火柱が熱を撒き散らし、灰すら残さず焼き尽くす。

その刹那、血溜まりの中に夜行が音を立てて崩れ落ちた。

「——ッ!?」

赤い飛沫を散らし、うつ伏せに倒れる夜行。

ピクリとも動かないその姿を、クリュスは声も出せず見下ろした。

凍り付いた脳髓が再び動き始めたのは、およそ数秒を経たからのこと。

そこでようやく彼女は、致命傷を負った夜行が目の前に倒れていることを理解した。

「……やこう、さま……?」

返り血塗れの身体で膝をついたクリュスが、夜行の肩を揺する。

「おき、て……ねえやこうさま、おきて……」

声を震わせ、瞳を揺らして、ぼろぼろ涙を零しながら、クリュスは夜行の身体を揺すった。

「やこうさま……ヤコウ様あツ! 起きて、起きてよおツ!!」

サイズの合っていない眼鏡がずり落ち、血溜まりに転がる。

黄金の瞳が溢れ出る雫で歪んだ。

「起きてえッ! お願いだから、起きてえッ! わたし、何でも言うこと聞くから……だ

から……ッ！」

漏れ出る鳴咽。瞬く間に冷たくなる身体に、己の熱を分け与えるように覆い被さった。

「——ヤコウ様ああああああッ!!」

かぶりを振って子供のように泣き、クリュスは喉が裂けんばかりに、ひたすら夜行の名を呼び続ける。

その一方で、倒れ伏す夜行に縋りつく姉の姿に、クリスティアーネは動揺と困惑を隠し切れなかった。

「……クリュス、姉さま？ 一体どうされたのです、何をそんなに——」

自分の言葉が全く届いていないクリュスへ近寄ろうと、クリスティアーネは1歩踏み出す。

その時——横合いから突き付けられた殺気に、反射的に剣を構えた。

「ぐうッ!？」

瞬間、凄まじい衝撃が全身を襲う。

辛うじて防御したもの、大きく吹き飛ばされたクリスティアーネ。

空中で体勢を立て直し、捻るように身体を回しながら着地して、衝撃を受けた方向へ鋭い視線を向けた。

そこに居たのは小柄な少女。

黒地に赤い模様の入った、風変わり且つ特徴的な衣装を着ている。

クリスティアーネの記憶では、それは確か、極東の島国『ワコク』に伝わる着物と呼ばれる民族衣装だった。

露出した肩を微かに震わせ、伏せた顔は長い黒髪がカーテンとなってよく見えない。

唐突に攻撃を受けたクリスティアーネは、正眼で剣を構え直した後、怒声を上げた。

「貴様、どういふつもりだ！ 何故わたしに剣を向ける!？」

「……どういふ、つもり？ 何故、剣を向ける……?」

ひらひら、ひらひら、ひらひらと。

少女の持つ長大な刀から、魔力で模られたピンク色の花弁が噴き出して舞う。

「そんなの……そんな、こと」

やがて刀の刃が、直前まで炉にくべられていたかの如く赤々と熱を宿した。

舞い散る淡い色の花弁は、小さくも激しい火の粉へ変わっていく。切っ先に触れた地面が、じゅうつと熱で溶ける。

黒髪のカーテンで覆われた少女の面が、人形のような動きで持ち上げられた。

「——こっちの、台詞だ」

派手さこそ無いものの端正な容姿。

赤い瞳が嵌め込まれた、光の宿っていない双眸。

大きく見開かれた眼には、たったひとつの感情がある。
その眼は真つ黒な怒りに埋め尽くされていた。

数メートルあった間合いを膂力任せの踏み込みで詰め、上段から——否。上段からの斬撃と見せかけ、もう片方の手に持っていた鉄拵の鞘を用いた突きを放つ。

「ッぐう!!」

クリステイアーネは剣による防御が間に合わず、身に付けた軽鎧で受けた。

小柄な体軀からはおよそ考えられない怪力で、鎧を突き抜け骨さえ砕きそうな衝撃がクリステイアーネを襲う。

息を詰まらせつつも、次いで放たれた袈裟斬りはどうにか剣で流した。

「く……なんなんだ、貴様は!? 見かけぬ顔だが、もしや勇者か!? だったら、わたし達が戦う理由など——」

「だまれ」

腹を蹴り飛ばされ、間合いが開いたところで横薙ぎの斬撃が振るわれた。

太刀筋をなぞり、飛来する真空の刃。

十中八九技と思われるその刃に対し、クリステイアーネもまた同系統の技で応戦する。

「剣術系技『カッターブレイド』」。

ぶつかり合ったふたつの刃は、しばし拮抗した後大きく爆ぜた。

「ハアッ……ハアッ……こうなつては、致し方ない……先に手を出したのは貴様だ、死んでも知らんぞ!!」

「……どの口が……どの口がそんなことを言うんだ、キサマアアアッ!!」

剣戟が舞い、火花が散る。

互いの刃がぶつかる度、双方の刀と剣が悲鳴を上げる。

「よくも……よくもオッ!!」

掠めるだけで骨まで灰になるだろう切っ先を、紙一重でかわすクリステイアーネ。

だが刀にばかり気を取られていては、時折攻撃の中に混ざる蹴りや、鞘による打撃に対応できない。

（なんだ、こいつは……ッ!? 何故、急に攻撃を……!!）

背筋に冷や汗を伝わせながら、クリステイアーネは頭の中に疑問符を躍らせた。

何故眼前の少女、美作サクラが烈火の如き憎悪で刃を向けてくるのか。

己の言動が間違っているなど、生まれてこの方考えたこともない憐れな女は気付かない。

——そして、彼女の行いは、決して怒らせるべきではない、怒らせてはいけない人間の逆鱗に爪を立ててしまった。

伊達雅近は、感情の宿らない瞳で静かに見下ろしていた。

白い服を血で赤く染めたクリユスが縋りつく、倒れ伏した親友を。

「……………」

胸を、心臓を貫かれ破壊された。

残っていた右腕の手首を、斬り落とされた。

雅近は驚くほどクリアな思考で、夜行の現状を見たままに確認していた。

そうして出た結論——夜行が殺された。

雅近は首だけで振り返り、サクラの猛攻に必死に耐えるクリステイアーネに視線を遣った。

「お前か……」

僅かな声の震えすらない、極自然な口調。

「お前が、夜行を……」

けれど次に囁かれたのは、喉の奥から怨嗟の全てを絞り出したかのような、おぞましい声音。

「お前が夜行を、オレの……」

——よし、決めた。

「取り敢えず、50年ほど思いつく限りの拷問にかけるとするか」

殺すのはそれからいい。半世紀もかければ、今よりもつといい手段を思いつくかも知

れない。

だから、まずは生かして捕らえなければ。

このままでは、怒り狂ったサクラが楽に死なせてしまう。

無造作な所作で、雅近が右手を天に掲げた。

掌を中心に形成されるのは、十重二十重の複雑怪奇な魔法陣。

「……美作なら、まあ避けられるか」

それに、たとえ当たったとしてひとまず死にはしない。

全容を把握することさえ、並の魔法使いには不可能な情報量を持った魔法陣が一斉に崩壊し、空へ1本の光柱が伸びる。

光柱は天高く上った後、音も無く砕け散った。

「『ペイン・ザ・レイン』」

そして輝く雨に姿を変えて、クリステイアーネとサクラの頭上に降り注いだ。

剣戟の交叉を幾度も繰り返し、それと同じ数だけ死の気配を感じる。

1歩どころか半歩判断を誤れば命の終わりに直結する崖っ縁で、クリステイアーネは我武者羅に抗った。

だがそれも虚しく、火で視界が狭まったところを突かれ、肋を碎かれる。

戦いの最中、敵の間合いで動きを止めてしまうという最大の愚行を犯してしまった。

首狙いの一閃。切っ先が歪むほどの速さを持った斬撃。

回避も防御も、到底間に合いそうになかった。

「ッー」

だが唐突に、サクラが攻撃を中断した。そればかりか大きく後ろに跳び、一気に間合いを離れたのだ。

「……な……ん、だ……?」

砕けた骨が訴える痛みにより、零す言葉が途切れ途切れになる。

頭上がやたらと明るい気がして、クリステイアーネはぎこちなく顔を持ち上げた。

見えたのは、すぐ近くまで迫っていた無数の光雨。

それが何であるのか考える暇すら無く、クリステイアーネの頬に落ちた。

じわりと、光は雨粒のように肌に染み入って、込められた効力を発動する。

「ッああああああああッ!? あああああああああ、あああああああああああッ!?」

大きく見開かれた目の瞳孔が、一瞬で開き切った。

空気を揺らすほど響くのは、喉が張り裂けんばかりの絶叫。

実際に喉を痛め、口から血飛沫を吐いたクリステイアーネが崩れ落ち、地面を掻き巻く。

今し方の骨折など比較にならないほどの激痛が全身を貫いた。

「いや、いや、いや、いやああああッ!! あが、いぎや、えああ、あつぐぎやああああッ!!」

もがき苦しむクリステイアーネに次々に降り注ぐ光の雨。

ひとつ身体に染み入る度、痛みは加速度的に増した。

極限まで圧縮された痛みの情報は時間感覚さえ狂わせ、1秒が数時間にも引き延ばされた。

その間に意識を失うことも、痛み慣れることも、精神が壊れることすら出来ず、たっぷり数十秒、体感で数十時間から数百時間にも及ぶ幻痛を受けた。

全てが終わった後、クリステイアーネは、身体を起こすことさえ出来なくなっていた。

——『ペイン・ザ・レイン』。

『殲滅魔法マスタリー』のレベルが5以上で行使できる、一風変わった魔法だ。

魔力を光に変換し、上空へ打ち上げた後に降り注がせる。

さながら雨のようなこの光に触れた者は、純粹な痛みだけを味わう。

元々は、ゴーストなど実体を持たない精神体に、有効なダメージを与えるためのもの。

雅近はその術式を少しだけ作り変え、生身を持つ存在にも効果が出るよう改良した。

「今回は更に、ブラックアウトやショック死を防止し、魔法の発動中は脳内麻薬の分泌を妨げ、精神崩壊しないようガードもつけておいたぞ」

どうだ、親切だろうと、冷たい眼をクリスティアーネに向けたまま、雅近が皮肉げに呟いた。

その横に立ち、雅近を激しく睨みつけるサクラが言う。

「……私にまで当たったら、どうするつもりだったの」

「しつかり避けただろう？ 世の中とは結果が全てだ」

事も無げに言い、視線を背後に移す雅近。

1分前と変わらぬ姿で倒れている夜行と泣き喚くクリュス。

……ぎりつと歯を軋ませ、また正面に視線を戻した。

「さて。オレはこれからあれの四肢を落とそうかと思う。取り敢えず向こう10年は、ギリギリ死なない程度の責め苦を与えながら、納得できる処刑法を考える」

——君は、どうする？

いつもの仕草で眼鏡を上げるが、よく見れば指先が震えている雅近の問いに対し、今度サクラが後ろをちらと見る。

「私は、戊伏を」

「……そうか……たの、む」

何かを必死に堪えた声音で、雅近は短くそう告げた。

雅近がクリスティアーネに向けて歩き出す姿を見遣ってから、サクラもまた踵を返した。

「……夜行……ッ」

小さく……だが不思議と通った雅近の声。

それを聞きながら、サクラは刀を鞘に収め、泣きじゃくるクリュスの肩に手を置く。

そして、ピクリとも動かない夜行の姿に……とうとう自身も涙を溢れさせた。

サクラは頬を伝う涙を拭うことも忘れ、夜行の背に触れようとした。

その時、西の地平線に太陽が完全に沈み——世界が夜に染まる。

Ψ

……………。

例えるのならば……そう。

まるで電池の切れかけた懐中電灯のような、薄ぼんやりしてハッキリしない意識。

眠っているのか、起きているのか。それさえ定かでない、とても据わりの悪い感覚。

ここは——ここは一体、どこなのだろう。

前後左右、どこを向いても何ひとつ変わらない、全く同じ景色だった。

何も存在せず、ただ黒とも闇ともつかない空間が、遙か先まで広がっている。

一瞬、自分は目を閉じたまま周囲を見渡しているのでは、と思った。しかし腕を持ち上げると、見慣れた手がしつかり視界に入った。

……あ、れ？ 手……？

なんととはなしに掌を握り、開いてみる。それを幾度か行う内、俺は唐突に気が付いた。自分にはもう、手など左右どちらに残っていないはずじゃないか、と。

だって、そうだ。よく思い出してみる。

俺の左腕は、ビセツカの町で『切り裂きジョーンズ』と殺し合ったあの夜に、顔を思い出すことさえ忘らしい仮面の剣士に斬り落とされ、灰すら残さず焼かれた。

そして右腕もつい先程、何故か全身から力が抜け、倒れてしまう直前に、撥ね飛ば、され……て……。

「あ、あ……あ……!?」

脳裏にフラッシュバックする、青薔薇の浮かぶ剣身が俺の胸を、背後から貫く光景。思い出した。寧ろ何故、忘れていたのか。

反射的に俺は、自分の胸に両手で触れた。

けれど腕と同様、心臓に穿たれた風穴など見当たらず、規則的な鼓動を刻んでいた。いよいよ、一体何がどうなっているのか分からない。

……ああ。

もしかしたら俺は既に死んでいて、ここは所謂死後の世界なのだろうか。

そんな笑えない考えを払うように、かぶりを振った。

だが、だったらこの状況はなんなんだ。

途方に暮れた俺は、無意識に天を仰ぎ見て——視界一面に、紅い輝きが広がった。前後左右、どこまで見渡しても黒と闇しか無かった虚空。

しかしその上方には、目を見張るほど大きく美しい、紅い満月が浮かんでいた。

異世界の『大陸』の夜空に在る蒼い月とは、対極の彩りを持った神秘の化身。

俺はお世辞にも芸術の類に理解がある方ではないが、そんな俺でも心から断言できるほど美しかった。

ついさっきまで胸に巣食っていた動揺や焦燥を忘れ、届くはずもないのに、思わず月に向かって手を伸ばしたその瞬間。

——グルルル。

突然、獣の低い唸り声が、耳の奥を小さく叩いた。

咄嗟に俺は周囲を見渡す。けれど獣など、どこにも見当たらない。

気のせいかと首を傾げると、また唸り声が響いてきた。

今度はさっきよりハッキリと。だが、声はすれども姿は見えず。

もどかしい気分になって軽く歯噛みしながら、周囲に隈なく視線を走らせる。
 ……やがて、ふと、そう言えばまだ一度も見えていなかった足下に顔を向けた。
 下を見ると同時に、俺はまたも目を見開くことになる。
 頭上に悠然と浮かんでいた紅い月、それと全く同じものが、当然のように存在していたのだから。

……その月が、水面に映る虚像であると気付くまで、随分と時間がかかった。

何せ細波ひとつ、波紋ひとつない完全な風。

磨き上げられた漆の如き黒い水面は、周囲に何も無いことも相俟って、水があると判断するのは至難だった。

彼方まで続く水面は足下を始点としている。

どうやら俺は、湖畔が波打ち際のような場所に立っているらしい。

実像と比しても何ら遜色ない美しさを持った、虚像の月。

淡く紅い輝きから名残惜しく目を離し、半歩だけ前に出て、そつと水面を覗き込む。

——そこに映った自分の姿を見て、俺はまさかと、あるいはやはりと、どちらとも取れる眩きを内心で発し、そして理解した。

獣のような唸り声を上げていたのは——他ならぬ、俺自身であった。

Ⅱ

うつ伏せに倒れた夜行の背に、サクラの指先が触れる直前。

太陽が地に没し、昼が夜に移り変わったその瞬間。

夜行の傍に居たサクラとクリュスは、腹部に激しい衝撃を受けて吹き飛ばされた。

「ッ!？」

「さやあッ!!」

完全な無防備だったにも拘らず、反射的に衝撃の逆方向に跳ぶことでダメージを相殺したサクラ。同時に、そんな器用な真似など出来ないクリュスを、地面に叩き付けられる寸前に受け止めた。

「げほ、げほ……!! ひく、げほッ!」

「大丈夫? 姫……今のは……」

激しく咳き込み、息も絶え絶えとなっているクリュスをそつと座らせ、サクラは油断なく正面に視線を向け——目を疑った。

「なッ……!？」

心臓を貫かれ、右手首を撥ね飛ばされ、大量の血液を失いピクリとも動かなかった夜行が、天を仰ぐようにして、いつの間にか立ち上がっていた。

「や……やこう、さま……？」

肩で息をしながら、震えた声音でクリュスが呟く。

「——馬鹿野郎、横になってろ!! どれだけの血を流したと思ってるんだ!!」

雅近が一瞬だけ安堵の表情を見せたが、夜行の服の隙間からばたばた流れ落ちる流血に氣付き、怒鳴った。

だが夜行は、皆の言葉など聞こえていないかのように、ただただ立ち尽くし、やがて静かに息を吸い上げる。

「——ッグルルルアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

そして激しく荒々しい、人間には決して出せないだろう音程と音量で、獣の咆哮を響かせた。

「夜……行……？」

動揺し、夜行に1歩、2歩と歩み寄る雅近。

「やこ、さま……ヤコウ様あ……ッ!」

クリュスは顔を歪めながら、夜行に手を伸ばす。

「グウウ……カロロロ……」

獣のような仕草でかぶりを振った夜行が、また天を仰ぎ見る。

フードの奥から覗く双眸が、うつすらと空に姿を現していた蒼い月を捉え、にたりと愉しげに口の端が吊り上げられた瞬間。

「ひひッ——」

変貌が、始まった。

「かひやひやひやはひひひやはあッ!! ひやあはははひひきや、あぎやぎやぎやぎやッ!!」

狂ったような、耳障りで怖気を誘う囁い声。

吊り上がった唇の隙間から、ずらりと並んだ牙の列が見えた。

目深に被っていたフードが内側から押し退けられ、毛先が腰に届く長さまで、髪が急速に伸びる。

毛並みもまた獣を思わせるボサボサの黒髪は、まるで狼の尾を模ったかのようだ。

そして、二の腕の半ばから切断された左腕と、手首から先が欠けた右腕。

すっかり不揃いになった両腕を広げ、甲高い囁い声をまたも響かせたかと思えば、骨が軋むような、肉を引き摺るような、生々しく不気味な音が鳴り始める。

やがて空っぽの袖が膨らみ、血塗れの右手と左手が——袖口から生えてきた。

指先そのものが鋭利な爪に変質したようで、人間のものとは思えない。

「な……!?」

息を呑むサクラと、驚きの声を漏らす雅近。

無論彼等は、手が異形であったことに驚いたのではなく、失われた両腕が再生していることに驚愕していた。

確かに夜行のクラス技能『ビーストアップパー』は、回復能力を高める副次的効果も備えているけれど、それはあくまで回復の範疇。

欠損した部位を取り戻すなど、明らかに再生の領域である。

「ひひひひひひひッ、ひひひひひひッ」

両手にべっとり付着した血を振り飛ばし、肩を震わせ夜行は嗤う。

よくよく見ると、コートの下に着ている黒シャツの隙間から流れていた血は、もう完全に止まっていた。

「……戌伏……戌伏ッ!」

珍しく語気を強め、名を呼ぶサクラ。

すると再三の呼び掛けによりやく反応を見せ、夜行は首だけを振り返らせた。

「……?」

その瞳は、優しげな光を宿していた濃褐色から狂気的な怪しい輝きを纏う琥珀色へ変わり、瞳孔も獣染みて縦に長い。

「ヒヤハハハハハアッ?」

人間としての色合いを損なってしまった獣の貌でサクラを見遣り、やはり夜行は嗤うのだった。

——場所が変わり、宮殿中庭。

「んん? なんだ、今の雄叫びみたいなのは」

「鬼島つちが、直進でぶっ壊してきた壁の向こうから聞こえてきたっしょ」

夜行の雄叫びは宮殿中に響き渡ったため、鬼島千影や柳本平助の耳にも当然届き、彼等はその正体を確かめるべく駆け出した。

更に――。

「……だいぶ楽になってきたわ……ところで、今のは何? 練兵場の方からみたいだけど」

「さあ? でも気になりますね、行ってみましょう」

体調の回復した雪代九々と、付き添いで傍に居た鳳龍院躑躅の2人も立ち上がる。

7人全員が集うまで……あと、3分。

——『月狼』。

有史以来『大陸』にて発見された598種に及ぶクラスの中でも、僅か5種類のみ存在する獣系に区分される、紛うことなき稀少クラス。

5種類の獣系クラスに共通して備わるクラス技能が『ビーストアッパー』である。

パッシブ系とアクティブ系の中間の性質を持ったこの技能の発動条件は、技能所有者が自身に明確な敵意を示す強者を探知するか、もしくは危機的状況に追い込まれること。

例外として、極度に感情が昂った際にも発動することがある。

主な効果は、性格の凶暴化、動体視力や反応速度など、感覚能力の劇的強化。

そして、それぞれの獣系クラスによって異なる条件を満たした場合にのみ、肉体そのものが変質し、獣に近付く『半獣化』だ。

かつて『大陸』を治める5柱の神々が、『始原の獣』と呼ばれる始まりの生命を創り出した。

狂喜と狂乱、憤怒のままに暴れ、月面すら自在に翔けた狂い果てし狼。

暴食の限りを尽くし、広大な海の悉くを喰い荒らした双尾の鮫。

大地に寝そべり惰眠を貪り、色に溺れた黒鱗の蛇。

傲慢にして強欲、煌々と輝く太陽を寢床とした4枚翼の鳩。

夜空を彩る星々に妬みを抱き、届かぬ牙を剥き続けた3眼の猫。

そんな、強大無比の戦闘能力、不死に近い生命力を有する、最古で最強の生物達がいた。進化の過程において失ってしまったそれら遠い祖先の力と姿を、古の血の濃度を高めることで一時的に蘇らせる強制的な先祖返り。

それこそ獣系クラスの有する、唯一無二の特性なのだ。

強大ゆえに制御不能。凶暴ゆえに抑制不能。

一度獣に立ち戻れば、技能所有者本人にすら止められない。

獣に戻れば戻るほど理性は失われ、敵味方の判別さえつかなくなる。

やがて、目に映るものの全てを狩り尽くすまで、あるいは己が死に果てるまで止まらなくなるだろう。

その昔『始原の獣』が、世界を滅ぼした時のように。

▽

「ひやぎやはひひひッ!! ひやはぎやぎやぎやアッ!!!」

頭痛を誘発する音の響きだった。

理性や知性が全く感じられない、狂いに狂った嘔い声が、第3練兵場にキンキンと響き

渡る。

第3皇女クリスティアーネの、乱心としか思えない行動。

その後の、『セブンスターズ』サクラと雅近との戦闘。

そして、絶命したはずの夜行の突然の復活と、異形と化したその風体。

練兵場にて訓練を行っていたため、ことのあらましを一部始終目に見ていた、少ない数の兵士達は、目まぐるしく移り変わる状況に、殆どが混乱するばかりだった。

「ヤコウ……様……」

「ッ……」

常に眠気を帯びているような目を見開き、瞳を揺らすクリュス。

夜行の発する異様な気配に、近寄ることが出来ず歯噛みするサクラ。

彼女等もまた、眼前の現実を完全に理解するには至っておらず、知識量において群を抜く雅近に、答えを求める視線を向けた。

……だが、今回に限って言えば、その判断は誤りと言えた。

何故なら。

「――」

常に余裕の態度を崩さない雅近が、呆然とした表情で夜行を見ていたのだから。

「さぎやぎやぎやはひやひやひッ！ ひやひひひひひッツ!!」

爪と指先が同化した異形の手。

ずらりと並ぶ鋭い牙。

ゆらゆら妖しい輝きを秘める、瞳孔が縦裂となった琥珀色の双眸。

フードを押し退けて伸び、毛並みが変わり果てた黒髪。

血溜まりを作るほどの出血は、傷口が塞がったことで完全に止まっている。

――破壊された心臓、並びに切断された両腕の再生と、失った血液の補充……明らかに回復の領域外にある、尋常ではない能力である。

が、そんなことはどうでも良かった。

死んだと思っていたのだ。安堵こそすれ、思考が止まるほどでは無い。

外見の変異だって、夜行自身から聞き及んでいた範囲のものだ。

取り立てて驚くようなことじゃあ、ない。

オレが信じられないのは。

オレが、理解できないのは。

「ヒヤアハハハハッ……!! ひひひひやはははアッ……!!」

質量すら感じられるくらい禍々しく、歪で寒気をする空気。

これを……こんなものを――夜行が、発しているのか……!!?

「嘘、だろう……？」

最も長く夜行と付き合ってきた雅近だからこそ、目の前でひたすら喰い狂っている男が、本当にあの夜行であるのか、俄かに信じられなかったのだ。

気配、雰囲気と呼ぶべきものがあまりに違い過ぎる。通常の『ビーストアッパー』発動による精神状態の高揚とは、明らかに別物。

それとなく観察した結果、通常発動時の高揚はあくまで表面的な性格に作用しているのだと、雅近は判断していた。

つまり、根の部分や癖、全体的な雰囲気は変わらなかったのだ。

なのに、今の夜行はまるで別人だった。

立ち方が違う、身の振り方が違う、首の曲げ方が違う。

いっそ他人の空似とでも言われた方が、信じてしまえそうなくらいに、細かい仕草が明らかに異なっていた。

容姿の変貌と同時に、人格そのものまで変わってしまった夜行を前にして、誰よりも頭が回るからこそ、雅近はどうすればいいのかすぐに判断を下せない。

結果、この場に居る全員が動けず、夜行に先に動くことを許してしまった。

「ひひ、ひひひッ——ゲルルルアアッ!!」

喰い声から一転、空気をビリビリと震わせる咆哮。不安定な精神状態を表しているかの



ようなその声に、周囲は一瞬硬直する。

元々ここ第3練兵場は、主に近衛隊が使用する施設だ。

サクラや雅近は元より、その他の兵士達も精鋭であり、それなりに修羅場を潜って来た猛者ばかりである。

異形染みた風体に変貌した夜行の、人間の出せる声量ではない咆哮に鼓膜と三半規管を揺さぶられるも、すぐに持ち直した。

そう。硬直したのは、時間にしてみれば1秒にすら満たない、まさに一瞬だけだった。

——けれど。

夜空に浮かぶ月の加護を受けた獣の速度は、体感時間すら圧縮する領域に到達していた。たかが一瞬、本来なら隙とさえ呼べないそのコンマ数秒が、夜行にとっては欠伸が出るほど長いロスタイムだった。

「がッ!？」

「ッ」

頭部に強い衝撃を受け、1歩仰け反る雅近。

視界の端では、サクラが弾かれるようにサイドステップを踏んでいた。

たたらを踏みつつ体勢を戻した雅近は、ずり下がった眼鏡の位置を正し、正面に視線を戻す。

しかし夜行の姿はなく、周囲を見渡して驚いた。

「——なッ!？」

十数人は居た近衛隊の兵士達が、それぞれ全く同時に吹き飛ばされていたのだ。

……この一瞬で、夜行がやったのか!? 速度の次元がまるで違う!

「上がり幅が大き過ぎるだろうッ!」

雅近は今更ながら自分の纏っていた魔力障壁が、今し方の一撃で剥がされていることに気づき、結論を出す。

(とにかく今は、夜行を止めるのが先だ……これ以上は、本気で收拾がつかなくなる!)

近・中距離戦の場合、雅近は単体だとほぼ戦力にならない。

近衛の兵士達は言うに及ばず。

つまり今夜行を直接止めることが出来そうなのは、サクラだけだ。

「美作ッ!」

夜行の不意打ちを唯一かわしたサクラに駆け寄り寄る雅近。

そうしながら、首から下げたアミュレットに魔力を注ぎ込み、剥がれた魔力障壁を張り直しておく。

「美作、取り敢えずゴミ掃除は後回しだ。このまま夜行が暴れたら、少なくともいいことにはならん。止めるぞ!」

「……………」
「……美作？」

返事どころか反応も示さないサクラに、雅近は首を傾げた。
確かに彼女は大きなアクションを取る性分ではないが、意思疎通が出来る程度には受け答えをする。

サクラは俯き気味に目蓋を閉じ、ぎゅつと拳を握って佇んでいたが、やがて薄く赤い瞳を覗かせると、苦々しげに齒を軋ませた。

「……やられた、わ」

そう小さく告げ、そつと己の左腰を撫でる。

仕草に釣られて雅近が見遣ると、そこに本来あるべき、彼女の小柄な身長には不釣り合いな長大な得物が――佩かれていなかった。

「……ッ」

顔を上げ、一点に視線を向けるサクラ。

練兵場の隅に立つ、大樹の天辺。高さにして7メートルはあるそこに、ダークレッドのコート裾を靡かせる影があった。

「くひ、ひひひッ……あぎやひやは、あぎやははははアッ！！！！」

バチバチバチバチと、魔力を受け付けない体質による拒絶反応で、掌からスパーク音に

似た音を響かせながら、口の端を三日月のように歪め、雅近とサクラを見下すように嗤う。

『流桜』を……盗られた……』

――鞘に納まった野太刀を見せびらかす夜行。

意表を突かれたとは言え、純粹な戦闘技術においては『セブンスターズ』随一のサクラが、攻撃自体はかわせたものの、まんまと得物を奪われてしまった。

瞬きひとつ出来るかどうかの間に差し挟まれた、攻撃と回避。

夜行は『ピーストアップパー』の過剰発動により、感覚だけでなく肉体も強化されている。故に、普段は十全に制御できない敏捷性が、ほぼ完全にコントロールできているだけでなく、スピードも極限まで高まっていた。

それこそ、サクラから『流桜』を奪い取れるほどに。

「くひやひやはッ」

雅近達をからかうように嗤うと、夜行は奪い取った野太刀を樹上に置き去りにして飛び降り、直立した姿勢のまま、音もなく着地する。

残念ながらサクラは、7メートルの高さまでは、ひと足に跳び上がることは出来ない。この状況で回収するのは難しいと、彼女は内心で舌打ちする。

「ひやはははッ」

それを感じ取ったのか、夜行はまたひとつ嗤い、次いで先程まで『流桜』を持っていた

手を数度、軽く振った。

魔刀を握っていたことで火傷でもしたのか、焦げるような小さな音と水蒸気を発していた掌だったが、どちらも数秒で完全に消えた。

およそありえない桁外れの回復力。

理性などまるで残っていない琥珀色の輝きを放つ、獣の双眸。

夜行はだらりと、両腕を肩からぶら下げるようにして、深い猫背の体勢を取る。

浮かべる笑みは、笑顔が元々は攻撃の予備動作であるという風説を、思わず信じてしまいうそうなくらい凶悪だった。

狂気と狂喜が、ぐちゃぐちゃと綱い交ぜとなっている。

「……………」

けれど、視線と笑みを真っ直ぐ受け止めたサクラは臆することもなく、いつもと変わらない様子で、夜行の立つ方へ歩を進めた。

得物を奪われたことで、実質技を封じられたにも拘らず、明らかに正気を失っている夜行との距離を、無警戒に詰めていく。

「サクラ様……！」

焦りを帯びたクリュスの声が届いても、彼女の歩みは止まらず、丸腰のまま、散歩でもするかのようにつくり歩いて——やがて、彼我の距離が２メートルほどに縮まった瞬間。

腕を振り上げ、夜行が動いた。

「グルルアッ!!」

短く吼え、地面を蹴る。

軽過ぎる足音とは裏腹に、その加速は常軌を逸していて、雅近やクリュスの目には、一瞬消えたように映った。

否——実際移動する様子を見ることが出来なかったのだから、視界から消えた、と言いつ換えるべきだろう。

外野が気付いた時には、既に夜行とサクラの間合いは完全に詰まっていて、人間の頭蓋程度なら容易に貫通してしまいうような鋭い指先が、振り下るされようとしていた。

「美作——ッ!？」

雅近とクリュス、そして夜行の攻撃に吹き飛ばされつつも意識を保っていた一部の兵士達が息を呑む。

防御力の然程高くないサクラがあんな一撃をまともに受ければ、タダでは済まない。

骨身諸共挟られ、血飛沫と肉片が飛散する、数秒後の未来。

いとも簡単にその光景を思い浮かべることが出来た彼等は、それぞれ動き出した。

「クソッ……!!」

間に合わないという理解しながらも、反射的に魔法を発動させようとする雅近。

立ち読みサンプル はここまで

「ヤコウ様やめてえッ……!」

理知無き者には決して届くことのない悲痛な叫びを、それでも響かせるクリュス。

ある兵士はどうか止めようと倒された己の身体を起こし、またある兵士はサクラが引き裂かれ殺される光景のおぞましさを、固く目蓋を閉じた。

「……………」

そして、今まさに獣の爪先に引き裂かれようとしているサクラは、光の宿らない赤瞳で、ちらと夜行を視界に収める。

「……馬鹿ね」

心底呆れたと言わんばかりに、溜息交じりの口調で、微かに呟いた。

——トン。

風すら斬るような速さで迫り来る、鋭利な刃と化した5本の指先。

しかし、それは彼女の柔肌を裂く直前に、手首に軽く当てられた手刀で、あっさり軌道を逸らされた。

更に——。

「ガアッ!？」

体勢が崩され、刹那が空きとなった腹部。

そこに、まるで吸い込まれるかの如く掌底が叩き込まれ、夜行は紙切れのように吹き飛

ばされていた。

「なっ……」

半ばまで魔法陣を形成しつつあった雅近は、予想とは全く異なるその光景に、僅かばかり目を丸くする。

「グウウ……ッ!!」

苦しげに唸りながらも空中で身体を捻り、軽い摩擦音を立てながら着地する夜行。

受けたダメージがそのまま変換されたような敵意を琥珀色の瞳に宿し、掌底を突き出したまま止まっているサクラを睨みつける。

対するサクラは、深く静かに息を吐きながらゆっくり構えを解くと、視界を遮る邪魔な横髪を撫で付け、耳に引っ掛けた。

「……雪代じゃあるまいし……私から『流桜』を奪っただけで……無力化できると本気で思った?」

サクラは首を傾げ、恐らくは通じないのだろうけれど、そう問い掛ける。

絶大な殲滅力とは裏腹に、白兵戦や乱戦では殆ど力を發揮できない雅近。

武器である魔銃を失えば、戦う手段そのものを失ってしまう九々。

奇襲や闇討ち専門ゆえ、直接的な戦闘能力が今ひとつ劣る平助。